

「ヒトノカケラ」

遠藤 大輔

登場人物

高柳	門馬	高橋	師岡	高山	石田	中村	首藤	首藤	小柳	寺沢	寺沢	首藤	早村	早村	横地	首藤
幸子	陽子	美幸	一馬	聖子	一彦	大吾	清子	弘	譲二	美千代	恭三	美保	千鶴	隼	カヲル	正平
(47)	(43)	(27)	(45)	(28)	(23)	(52)	(53)	(54)	(53)	(60)	(62)	(32)	(20)	(26)	(34)	(30)
	正平の親戚	病院の受付係	医師	正平の同僚	隼の同僚	隼の勤め先の社長	弘の妻	正平の伯父	正平の叔父	美保の母	美保の父	正平の妻	隼の妻	事故の加害者	正平の不倫相手	会社員

○セレモニーホール（夜）

喪服姿の人々。

飾られた遺影は若い女性、首藤美保

（享年32）。

喪主席で弔問客に頭を下げている夫の

首藤正平（30）。

正平の隣は美保の父、寺沢恭三（62）

と、母の美千代（60）。

美千代は涙が止まらず、ハンカチを顔

から離せない。

弔問客の列の後ろでヒソヒソ話をして

いる親戚の門馬陽子（43）と高柳幸

子（47）。

陽子「結婚したばかりなのに可哀想に」

幸子「まだ若いのにねえ」

陽子「亡くなり方が亡くなりかただしねえ」

正平の表情からは周囲の声が聞こえて

いるようにも伺える。

お焼香の列に並んでいる横地カヲル

（34）。

カヲル、正平に頭を下げる。応じる正平。

カヲル、去り際に視線を送るが、正平は気づかぬふりをする。

○回想・正平のアパート（2日前・夜）

ダイニングで向かい合っている正平、美保、カヲル。

正平「別れてカヲルと一緒にになる」

美保「そう」

カヲル「怒らないの？」

美保「こういう時に泣き喚いたり、取り乱す

女ってみつともないじゃん」

カヲル「それだけ？」

美保「どういう意味？」

正平「とにかく、俺とは別れてください」

答えず、黙って席を立つ美保。

美保「ちよっと頭冷やしてくるから待っていてもらっていいかな」

外へ出て行く美保。

カヲル「追いかけてなくていいの？」

正平「追いかけてもかける言葉ねえもん。こ
ういう時って謝っても意味ないから、必要
以上には謝りたくないんだよね」

カヲル「まあ謝られてもきつと、嬉しくはな
いと思うけど」

外から衝撃音が聞こえてくる。

ビクつと反応する正平とカヲル。

反射的に外へ飛び出す正平。追いか
けるカヲル。

○回想・道路（夜）

路肩に乗り上げて破損した車。

後方に人が倒れていて、血が地面に溢
れている。

遠巻きにフェードインしてくる救急車
の音。

○現在・セレモニーホール（夜）

思い出していた正平。

入口の方から罵声が聞こえてくる。大声を出しているのは正平の親戚の小柳譲二（53）。

小柳「帰れ！！ どの面下げてきたんだ」

小柳に頭を下げている早村隼（26）

と、隣には妻の千鶴（20）。

千鶴のお腹は膨らんでいる。

隼「お焼香だけでもできませんか？」

小柳「あんたにあげてもらっちゃ、美保ちゃんには成仏するにもできないんだよ。人殺しが！」

周りからすすり泣く声が聞こえてくる。

小柳「俺はな、正平の両親が亡くなってから実の子のように面倒見てきたんだよ。ようやく幸せになれたと思ったらこんな風にしやがって、てめえは！」

奥から顔を出した恭三と美千代。

恭三「おい、娘を返せよ」

美千代「人殺し！ 人殺し人殺し人殺し！」

隼に襲い掛かろうとする恭三と美千代

を周りの人が必死におさえ込む。

人だからから顔を覗かせる正平。

正平「おじさん」

小柳「正平、こっちは任せとけ」

正平「お焼香してもらってください」

小柳「おい」

正平「どうぞ」

隼「あ、ありがとうございます！」

隼と一緒に深々と頭を下げる千鶴。

冷ややかな視線の中、お焼香へ向かう。

正平「おじさん、どうもありがとう」

正平、小柳に頭を下げて喪主席に戻る。

まだ暴れている美千代と恭三。

美千代「人殺し！ 人殺し！」

恭三「絶対殺してやる！ お前も！ お前の

女房も子供も全部！ おい！ おい！」

真剣に手をあわせている隼と千鶴。

○同・宴会場（夜）

お斎。

正平、叔父の首藤弘（54）と叔母の

清子（53）にビールを注いでいる。

弘「色々大変だったな。美保さんには結婚式
でしかお会いしたことなかったけど、綺麗
な人だったな」

正平「忙しい中、来て頂いて美保も喜んでま
す」

清子「正平ちゃん、今は皆がいるし忙しいか
らあんまり実感ないかもしれないけど、あ
んまり思い詰めちゃだめよ。まだ若いんだ
からいくらでもやり直しきくんだから」

弘「おい。今言うことじゃないだろう」

後方には恭三が同じようにビールを注
いで回っている。

美千代は座ったまま茫然としている。

清子「とにかく、何か困ったことがあったら
何でも言って」

正平「ありがとうございます」

○正平のアパートの前（日替わり）

お坊さんをお見送りしている正平。

○同・正平の部屋

お茶を淹れている美千代。飲んでいる

恭三、正平。

美千代「正平さん、おかわりは？」

正平「いえ」

恭三「一杯茶はよくないぞ」

正平「じゃあ、頂きます」

注いでやる美千代。

正平「おかげさまで、無事初七日も終わりました」

美千代「疲れたでしょう。色々慌ただしくて」

正平「いえ、慌ただしい方が気が紛れます」

恭三「そうかもな。色々取り乱して申し訳な

かったな」

正平「いえ、当然です」

恭三「我慢してないか？ 大丈夫か？」

正平「悲しみが遅れてきてるっていうか」

美千代「そうね、実感したら辛いもんね」

正平「……はい」

美千代「けど本当によかったのかな？ 示談にしちやって」

恭三「それはもう決めたことだろう」

正平「あんまり長引かせたくなかったんで。

僕たちがずっとこういう顔してるのは多分、

美保も望んでないと思うし」

美千代「そりゃそうだけどね、悔しいじゃないせつかく32年も大切に育ててきて、これからって時に命奪われてさ。それで罰金がたった100万円なんて。美保の命は100万円なの……」

正平「他に賠償金2000万も」

美千代「額の問題じゃないのよ」

正平「すみません。そういうつもりじゃ」

恭三「お金の話はさ、美保の前ではよそう」
にっこり笑っている美保の遺影。

正平「……」

恭三「正平くん、仕事はいつから？」

正平「明日から出ようと思ってます。けっこ

う溜まってる仕事もあるんで」

美千代「もう少し体調整えてからにすれば？」

恭三「男は仕事をやってた方がいいんだよ」

美千代「私は何をやってた方がいいんですか？」

恭三「それはゆっくり考えればいいさ」

美千代「ゆっくりなんて長すぎる……」

恭三「くれぐれも無理のないように。これからも家族としてできることはしていくから」

正平「ありがとうございます」

恭三「私が言う台詞じゃないかもしれないが、あんまり縛られなくていいんだよ。自分で色んなものに縛られてると感じると、自分の幸せ逃してしまうからね」

正平「ありがとうございます」

床につき、頭を下げる正平。

○同・正平の部屋（夕）

部屋の整理をしている正平。手伝っているカヲル。

カヲル「私触らない方が良い？」

正平「いや、助かるよ」

カヲル「じゃあやる」

インターホンが鳴る。

カヲル「私行ってくる」

正平「あ、ちよつと俺が出た方が」

カヲル「あなたが出て、奥に私がいた方が変に思われるでしょ」

正平「あー、じゃあお願い」

正平、部屋の隅にまとめられた美保の衣類をなでるように触る。

戻ってくるカヲル。

カヲル「お線香あげたいっていうんだけどどうする？」

正平「どうって、あがってもらってよ」

カヲル「美保を轢き殺した人なんだけど」

正平「え」

× × ×

正座をしてお線香をあげ、骨壺に手をあわせている隼。

隼の後ろに座っている正平とカヲル。

隼「ツチ」

正平「？　今、舌打ちしました？」

正平の方へ向き直る隼。

隼「しました」

カヲル「ちよつと何考えてるんですか。あなた自分のしたこと分かってるんですか？」

隼「やっぱおかしいすよ！　飛び出してきたのは向こうの方ですよ！」

正平「！？」

隼「俺は法定速度で十分注意しながら運転してたんです！　だけどあんな急に飛び出してこられたら無理でしょ」

カヲル「あなたここがどこで、誰に向かって言ってるか分かってんの」

隼「分かって言ってるんです！　俺が、俺だけが悪いんすかね！　自転車と歩行者なら自転車、自転車と車なら車、車と歩行者なら車が絶対悪いんすか！　歩行者はそんなに偉いんすか！　死にたいなら勝手に死んでくれてんだよ。最後まで人様に迷惑

かけんじゃねえよ」

正平「それはどういう？」

隼「そのまんまの意味ですよ！ 自殺でしょ。

なにがあつたか知らないけど」

カヲル「彼女がそんなことするわけないでし

よ！」

隼「そんなのどうして分かるんすか？ 逆に

何か思い当たる節でもあるんすか？」

カヲル「ないよ！」

隼「家庭の事情とかよく分かんないし、俺に

は関係ないす。とにかく金は払い続けます

よ。けど、金輪際会うことも謝ることもな

いんで、よろしくどうぞ」

カヲル「（正平に）ちよつと黙ってないでさ」

正平「いやあ、けっこう本当のことだなあと

思つて。本当のこと言われちゃうと、こつ

ちは精神論でしか返せなくなるなあって。

それはちよつと、俺もきつい」

カヲル「何言っちゃつてんのよ、正気？」

正平「ちよつとでもあいつを庇うような台詞

はいちやうと、自分の感情もよくわかんなくなるから」

カヲル「それでも人間なの！ 仮にも奥さんだった人が死んだんだよ」

正平「って、感じになるのが俺は嫌なんだよ」

隼「なんかよくわかんねえけど、俺はこれで」

隼、立ち上がろうとするが慣れない正座のせいでついよろけてしまう。

その姿を見て笑いだす正平。

隼「笑うなよ、お前が俺を見て笑うなよ！」

這いつくばりながら外へ出て行く隼。

カヲル「私、あんた、ちょっと怖い」

正平「はは、ははは」

正平の笑い顔は泣き顔のようにも見えてくる。

○物流倉庫（日替わり）

沢山の大型トラックが行き来して、段ボールの荷降ろし、荷積みが行われて
いる。

搬入ホームにバックで入ってきて停車した1台のトラック。

トラックの荷台を開ける作業着姿の隼。

その後ろから金髪の青年、石田一彦

(23)がフォークリフトでやってくる。

フォークのパレットの上に荷物を降ろし始める隼。

石田「隼さん、俺この後急な運送入っちゃったんで荷降ろし任せちゃっていいですか？」

隼「いやでも俺、フォークリフトはちよつと

…」

石田「あれ？ 車だけじゃなくてフォークも乗っちゃダメなんでしたっけ？」

隼「悪い」

石田「マジっすか。それじゃ本当に荷降ろししかできないじゃないっすか。あ、じゃあいいっす。他の奴に頼んでおくんで」

隼「(笑顔で)ごめんな。荷降ろししておくから」

石田「ういつす」

ちやらちやらと去っていく石田。

隼「ツチ」

必死に缶ジュースの入った段ボールを
パレットの上に降ろしていく隼。

○同・事務所（夕）

着替えを終えて帰ろうとしている隼を
呼びとめる社長の中村大吾（52）。

中村「隼」

隼「お疲れ様です」

中村「どうだ？ 新しい部署は？」

隼「まだ慣れてないですけど、頑張ります」

中村「慣れも何も荷物運ぶだけだろう。前み
たいに搬入時間に追われたり、自販機から
お釣りがでてこないとかクレーム言われな
くていいだろう」

隼「まあ、そうすね」

中村「無理すんなよ」

隼「無理ってどういう意味ですか？」

中村「え？」

隼「当分車の運転できないから、無理しないで早く辞めろってことですか？」

中村「そんなこと言ってないよ。奥さんもうすぐ臨月なんだし、新しい部署でハリキリすぎて遅くまで残業したり、体壊すなつて意味だよ」

隼「……すみません」

中村「しばらくは仕方ないだろうがな。お疲れ様」

隼「お疲れさまでした」

○正平のオフィス（夜）

パソコンを閉じようとしている正平に

近づいてくる高山聖子（28）。

聖子「お帰りですか？」

正平「うん」

聖子「夕飯ってどうしてるんですか？」

正平「あー、外食かな。俺、料理できないし」

聖子「だったら今晚一緒にしません？」

正平「へ？」

聖子「実はレストラン予約してたんですけど、友達に急にキャンセルされて」

正平「ああ（そういうことか）」

聖子「それに一人で食べてると、何か義務みたいな感じしてきませんか？ 夜になったから夕飯食べなきゃいけないみたいなの」

正平「まあそうかな」

聖子「せっかくならおいしいご飯食べたいじゃないですか」

正平「なんか都合がいいけど、せっかくだから」

聖子「今、私も片付けますから」

○隼のアパート（夜）

隼が帰ると、千鶴が料理をしている。

千鶴「お帰りなさい」

隼「動いてて大丈夫なのかよ」

千鶴「うん、今日はだいぶ調子いい」

隼「あんま無理すんなよ……いや、ゆっくり

休んで」

千鶴「一日中休んでるよ。私、本当タイミング悪いよね。こんな時にこんなお腹おつきくて。来年の今頃には私も働きだせるからさ」

隼「千鶴は子供のことだけ考えてるよ」

千鶴「ありがとう」

隼「ご飯、俺がやるよ」

千鶴「いいから先にお風呂入ってきてよ」

隼「ありがとう」

隼、風呂場へ向かう。

○同・脱衣所（夜）

隼、脱いだ服を思いっきり握りしめる。

○正平のアパート（夜）

正平が帰るとカヲルが料理を作っている。

カヲル「おかえりい」

正平「なにやってんの？」

カヲル「なになって見ての通り、ご飯作ってんの。私もさつき仕事終わったばかりだから今になっちゃったけど。あれ、もしかして食べてきちやった？」

正平「いや、そうじゃなくて、何で俺の家に勝手に入って、勝手なことしてんのって」

カヲル「え？ 問題？ 何が問題？」

正平「49日終わったばかりだし、こんな感じを近所に見られたら何言われるかわかんないよ。ほんと噂話しか楽しみがないよ
うな町なんだから」

カヲル「直に夫婦になるんだからいいでしょ」

正平「いや、まだ決めたわけじゃないし」

カヲル「じゃあこの子どうするの？」
自分のお腹をなでるカヲル。

カヲル「もう21週目だよ。中絶できないから」

正平「ウソ！ なんて言わないの」

カヲル「49日が終わるまで色々待ってくれ
って言ったの正平でしょ」

正平「色々って色々だろ！」

カヲル「私は、ああその後と一緒にいるから筋を通すって意味だと捉えたんだけど」

正平「そういうのもっと確認してよ！ 分かる様なつもりでいるのが一番怖いよ」

カヲル「私と結婚したくないってこと？ だってもともとそのためにあの日も美保と話し合ってたんじゃないん？」

正平「状況が色々変わったでしょう。もうちよつと時間をかけてさ」

カヲル「時間かけたら、この子もう産まれちゃうよ！」

急いで上着を着て、出て行こうとする

カヲル。

正平はじつとみている。

カヲル「私のことは追いかけてくる？」

正平「は？」

カヲル「絶対に追いかけてこないでよ！」

正平「それどっちの意味だよ」

出て行くカヲル。

正平「なんで女ってすぐに飛び出すんだよ……」

○物流倉庫（日替わり）

荷降ろしをしている隼に慌ててかけよってくる中村。

中村「隼！ 携帯はどうした？」

隼「え？ なんすか。携帯がどうかしました？ ロッカーですけど」

中村「持ち歩いてなかったら携帯じゃないだろ」

隼「いやだって、今の仕事で必要ないし。」

え？ てか、なんすか？」

中村「奥さんが病院に運ばれたぞ！」

隼、慌てて事務所へ向かう。

○病院・個室の病室（夕）

酸素マスクをつけ、眠っている千鶴。

○同・診察室（夕）

医師の師岡一馬（45）に説明を受けている隼。

師岡「切迫早産の疑いがあつたんですが、今は落ち着いています。母子ともに無事です。予定日がくれば通常分娩できます。まあしかし一応様子を見て1週間ほど入院して経過を見た方がいいと思います」

隼「よかったです。ありがとうございます！」

師岡「じゃあ受付の方で入院手続きとか説明を聞いてください」

隼「はい！」

○同・受付（夕）

受付係の高橋美幸（27）から説明を受けている隼。

隼「1泊5万！　そ、そんなに高いんですか？　別に個室じゃなくてもいいんで、4人部屋とかに移してください」

美幸「あいにく大部屋は埋まっております、現在ご利用の個室しか空いてないんです」

隼「じゃ、じゃあ、一度退院して別の病院行きますよ。現状は落ち着いてるみたいだし、経過みるだけの入院みたいなんで」

美幸「その辺は私には何とも言えません。先生に相談をしてみてください。本日の18時までにご返事お願いします。手続きがありますので」

隼「はあ」

美幸「それとひとまずこの書類だけでもご記入頂いて、それからですね」

隼「ああ、はい」

○正平のアパートの前（夜）

コンビニの袋を提げて帰ってくる正平。
部屋の前に隼が立っている。

正平「？」

隼「どうも」

思わず会釈をしてしまう正平。

○同・部屋（夜）

正平に土下座をしている隼。

隼「お願いします！ 俺にお金を貸してください！」

正平「え？ え？ ちょっと待って。よくわかんない。え？ どういうこと？」

隼「千鶴が……嫁が入院してお金が必要なんです。だからお願いします！」

正平「お金が必要な理由は分かったけど、どうしてそれを俺に言ってくるわけ？ だって、君は加害者で俺は被害者遺族でしょ」

隼「生命保険おりましたよね？ それを貸してください！ 必ずあとで返します。他に頼める人いないんです」

正平「いるでしょう。両親とか親せきとか消費者金融とか」

隼「俺ら二人とも両親がいないんです。それに昔ちよつとあってヤミ金からもつまめななんです」

正平「知らないよそんな事情。他にもいるでしょ、友達とか。少なくとも頼むのは絶対

に俺じゃないでしょ」

隼「こうして頭下げてるじゃないすか。それでもあんた人間かよ」

正平「うわ、なにこの感じ。頭下げられてるのに上から言われてる感じ。そもそもそっちの事情は俺には関係ないし」

隼「人殺し！」

正平「それあなたが言う？」

隼「もとはと言えば（遺影を指さして）この人が自殺なんてしたからこうなってんじゃないすか！　あなたがしっかりしてれば自殺なんかしなかっただろうし、俺もこんな状態になんてなってなかったんですよ。だから少しは責任感じてお金貸してくれてもいいじゃないすか。それが人間ってもんですよ」

正平「無茶苦茶だよ！　さっきから聞いてるけど無茶苦茶すぎるだろ！　彼女が自殺かどうかなんてどうして君が言えるんだよ。何を根拠にそんなこと決めつけて、挙句お

金を借りるようなマネができるんだよ。どうかしてるよ」

隼「自殺だって証拠ならありますよ」

正平「え？　どんな？」

隼「遺書がある」

正平「ウソだあ。遺書持ったまま車に飛び込むやつなんていないよ。だって轢かれてぐちゃぐちゃになっちゃったら遺書の意味がないだろ」

隼「轢いたあと、自分の身の潔白を証明しようとしてスマホで動画撮ってたんですよ。で、かけよったらあの人がつぶやいたんですよ」

正平「そんなの作り話でしょ。だって、なんでそれを警察に言わないんだよ」

隼「言えないような内容だったから」

正平「なんて言ったんだよ」

隼「見たいですか？」

正平「恐喝するつもりか。その手には乗らないよ」

部屋を見回す隼。

気が気でない正平。

隼「こないだここにいた女の人は今日はいないんすか？」

正平「はあ？」

隼「あの女と深い関係なんですよ」

正平「あの人はただの彼女の友達で」

隼「あの女が原因で、奥さん自殺したんですよ」

正平「！？」

隼「奥さん殺したの、俺じゃなくてあんたたちでしょ」

正平「（何も言えない）」

隼「明日また来るんで、とりあえず300万円。どうか貸してください。お願いします」

隼、頭を下げたあと出て行く。

座りこむ正平。

○喫茶店（日替わり）

正平とカヲル。

カヲル「で、どうすんの？」

正平「それがわかんないから相談してんじやん。他人ごとみたいに言うなよ」

カヲル「本当調子いいね」

正平「こないだは悪かったよ。俺だってこれからのこと真剣に考えてるんだよ」

カヲル「ふーん。……わかった」

正平「カヲル」

カヲル「そもそもさ、何か問題ある？」

正平「え？」

カヲル「だから、例えば本当にそういう動画があつて、本当に美保の今際の言葉があつて、私たちのせいで自殺しましたーなんて言つてたとして、何か問題ある？」

正平「問題……ないかな」

カヲル「そう！ ないでしょ。そりゃ美保の御両親から責められたり、世間の人から冷たい目で見られるかもしれないけど、それだけでしょ。別に逮捕されたりしないですよ」

正平「でも美保の両親から訴えられるかも」

カヲル「そしたらお金払えばいいだけでしょ。それに自殺だろうが他殺だろうが事故だろうが、加害者はあの男には違いないんだから、別に私たちがなにか追い目を感じる必要なんてないんじゃないかな」

正平「こういう時、女って凄いな」

カヲル「女っていうか母親ね」

正平「ああ……」

カヲル「いいわ。今晚、一緒に話ししてあげる」

正平「助かる」

カヲル「正平だけの問題じゃないもんね」

お腹をなでるカヲル。

正平「（なんか複雑）」

○正平のアパート（夜）

隼が持ったスマホの動画を見ている正平とカヲル。

隼「以上です」

スマホをしまう隼。

隼「やっぱり見なかった方がよかったんじゃないか」

正平「いや、そんなことはないけど」

カヲル「あんた、自分が轢いて血まみれになって死にそうな人によくカメラ向けたね」

隼「あわよくば自分が飛び出して悪かったですみたいなコメントとれば、俺の罪も少しは軽くなるのかなって考えたんで」

カヲル「しつかりしてるっていうか非情っていうか。けどこの動画、別に遺書とかその類のものじゃないじゃん。美保だってあんな状態になったら頭錯乱してたろうし」

正平「……」

カヲル「こんな動画をばらまいたところで、別に私たちにはなんの影響もないわけ。したいならそうすれば」

隼「俺、別にばらまくつもりなんてないすよ」
カヲル「なんでよ？ お金要求してきたですよ」

隼「別にお金をくれって言ったわけじゃないし。ただ、貸して欲しいだけ。なんだった

「この動画、今ここで消しちゃってもいい
すよ」

隼、スマホを取り出して動画を削除し
ようとする。

手を掴んで止める正平。

正平「待って」

隼「どうしてですか？」

正平「まだ待って」

隼「分かりました」

スマホをしまう隼。

正平「300万だっけ？」

カヲル「ちよつと！ 何言ってるの？ まさ

か払う気？ それじゃまるで私たちが美保

を自殺に追い込んだって認めてるみたいじ

ゃん」

正平「そうじゃないよ」

カヲル「そうだよ！ それに私たちだってこ

れからお金必要なだからね！ 分かって

る？」

正平「あげるわけじゃないよ、貸すだけだよ」

カヲル「本当に返ってくると思ってるの？」

隼「あんた馬鹿！？」

隼「楽なんでしょ」

カヲル「なにが？」

隼「俺にお金を貸しちゃった方が楽になれる
んでしょ、二人とも」

カヲル「なにそれ……」

美保の遺影を見ている隼。

正平「用意するからまた取りにきてくれるか
な」

隼「どうも」

○病室（日替わり・夕）

ベッドの上で夕食を食べている千鶴。

着替えを入れ替えている隼。

千鶴「ここのご飯美味しいよ。一緒に食べる？」

隼「いいよ。千鶴が食べて栄養つけないと」

千鶴「だね。あー、一回退院して、また出産
の時に入院するなんて面倒臭いね。このま

ま入院して産ませてくれればいいのに」

隼「そうだね」

千鶴「冗談だよ」

隼「分かってるけど」

千鶴「ねえ個室なんか高いんじゃないの？」

私大部屋でも全然いいよ」

隼「今、大部屋満室なんだって。それに別にそんな大した額じゃないから、周りに気にせずにつくり休みなよ」

千鶴「うん。ありがと」

○正平のアパート（夜）

正平が帰ってくると、家の前で隼が待っている。

正平「お金はまだ準備できてないんだ」

隼「いや。えっと、飲みに行きませんか？」

○居酒屋（夜）

小汚い店内だがそれなりに賑わっている。

隅のテーブル席に座っている正平と隼。

隼「こういう関係ってなんかおかしいんだろ
うけど」

正平「いや別におかしくないよ」

隼「今、嫁が入院してて一人で飯食うのもあれで、他に行く人もいなくて」

正平「会社の人とか、友達とかは？」

隼「俺がいると、色々と会話に気をつかわせ
ちゃうし。っていうか、今ちよつと浮いて
る状態だし」

正平「そう。俺も同じようなもんかな」

隼「俺、初めてのことなんでよくわかんない
すけど、事情はどうであれやっぱり俺のこ
と殺したいくらい憎いですか？」

正平「うーん。俺だって一応は好きで結婚し
た相手だからね。でもよく分かんないんだ
よ。君を責めるべきなのか、自分を責める
べきなのか、彼女を責めるべきなのか、誰
も責めるべきじゃないのか」

隼「だからなんです、俺と話しても感情

的にならないのは」

正平「ならないっていうか、なれないって感じかな」

隼「すみませんでした」

正平「金輪際謝罪しないんじゃないっけ」

隼「こういう人だと思ってなかったんで」

正平「自分のしたことじゃなく、相手がどういう人かで謝るかどうか決めるのか」

隼「すみません」

正平、隼にビールを注いでやる。

正平「人を憎むのってエネルギーいるよな。

ずっと憎んでいる方がきつと心は楽だから
なんだと思う。でも、それもしんどいよね」

隼「新しい人生として歩むってのはどうか？
か？ こないだの人と結婚するんすか？」

正平「わかんない。そのつもりだったんだけどね」

隼「タイミングってやつがありますもんね」

正平「本当に好き同士ならタイミングもなにも関係ないでしょ。タイミングって言い訳

のひとつでしょ」

隼「確かに」

正平「君のところは仲よさそうでいいな」

隼「でも、今の俺たちに必要なのは愛情じゃなくて、お金です。これけっこうしんどいです」

正平「そう」

隼「あ、けど事故起こしてから、ちよつと俺変わったんです」

正平「なにが？」

隼「自販機のドリンクを補充する仕事やってんですけど、たまにお釣りがでてこないとかですんげえ苦情くるんですよ。たった10円や20円すよ！なのにどう落とし前つけてくれるんだっていいがかりつけてくる人結構いるんです」

正平「（聞いている）」

隼「前はうるせえなあ、なんでこんな文句言われなきゃいけないんだって思ってたんですけど、今はそんなの全然大したことない

なつて。だって10円20円返せばいいんですもん。それでも納得しない人には多少色つけて返金すれば大抵は済みますもん。お金で解決できる問題は楽ですよ」

正平「うん」

隼「あと、その人がどうしてたかが10円でそんなに怒ってんのか考えるようになりました。もしかしたらその10円が足りなかったから、前から欲しかったものが買えなかったとか、その10円がなかったから公衆電話から好きな人に気持ちを伝えきれなかったのかなつて」

正平「今時公衆電話はないだろ」

隼「例えです。なんつーか、その人にしかわかんない価値観や大事なものがあるんだなつて」

正平「君にだってあるでしょ、そういの」

隼「うーん。社会にでて生きていくと、そんなの無視してやんなきゃいけないことがあるる」

んすね」

正平、黙って隼にビールを注いでやる。

正平「どうなるんだろうな、これから俺たちは」

隼「わかんねっす」

隼、正平にビールを注ぎ返す。

○正平のアパート・踊り場（夜）

スーパーの袋を持って、鍵を開けようとするカヲル。

視線に気づき、振り返ると美千代が立っている。

美千代「あ」

慌てて、階段を降りて行く美千代。

ため息をついて部屋に入るカヲル。

○スナック（日替わり）

テーブル席に座っている恭三と美千代。重いドアが開いて入ってくる正平とカヲル。

正平「こんにちは」

恭三「そこ座って」

カヲル「失礼します」

正平と並んで座るカヲル。

恭三「すぐ分かった？」

正平「はい」

恭三「知り合いがやってる店で、夜の営業まで貸してもらったんだ。君達を家にあげて話すわけにもいかないし、他のお客さんがいっぱいいる店でもちよつと思つてね」

正平「はい」

カヲルを睨むように見ている美千代。

カヲル「あの、横地カヲルって言います。美

保さんとは大学時代の先輩後輩でした」

美千代「そう」

恭三「どうして来てもらったのか、君たちも分かってると思うが、聞かせてもらえないかな？ 一体美保と君達との間で何があったのか」

正平「はい」

美千代「ちょっと待って」

美千代、テーブルの上にボイスレコーダーを置く。

美千代「録音させてもらいます。裁判の時に重要になるんで」

正平「どうぞ」

恭三「まず君達の関係は？」

正平「恋愛関係です」

恭三「いつから？ 美保が死んで2カ月が経とうとしているが、いつから？」

正平「1年ぐらい前からです」

恭三「つまり、美保と結婚してたのにこの人と不倫してたってことかな？」

正平「はい」

美千代、机を思いつきり叩く。

その音に驚くカヲル。

恭三「それを美保は知ってたのかな？」

正平「事故があったあの夜、二人で美保に話しました」

美千代「その夜に美保が事故にあって死んじ

やうつてどういうこと！？　ねえどうし

て？」

正平「少し頭冷やしてくるからって外に出て、
そのまま」

手を顔にあてて泣きだす美千代。

恭三「正平君、君はどう考えてるのか教えて
欲しい。美保は不運な事故にあったのか？
自殺したのか？　それとも君たちに殺され
たのか」

正平「……」

カヲル「あの、さつきから聞いてれば」

恭三「あなたは黙っててください。美保の旦那
だった正平くんに聞いているんです」

正平「……分かりません」

美千代「分かんないわけないでしょ！　自殺
したのよ！　きっとショックで頭が混乱し
て」

正平「どっちにしろ、美保さんが亡くなった
のは俺のせいです。申し訳ありません」

頭を下げる正平。カヲルは毅然とした

態度をしている。

恭三「今更ね、何言ったって美保はかえってこないからね、何言っても無駄だって分かるんだけどね、恨みの一つや二つ言いたくなるよ。私たちは娘を不幸にさせるために必死に育ててきたわけじゃないんだよ。幼い頃に両親を亡くした君は、親の愛情を受けたことがないから分かんないのかもしれないけどね」

重いドアが開き、入ってくる隼と千鶴。

隼「あの」

正平「どうして？」

叫び声をあげる美千代。

脅える千鶴。

恭三「どうしてお前がここに来るんだ」

カヲル「私が呼んだんです。中に入って」

隼「いやでも」

カヲル「（隼に）スマホ出して」

隼「でも」

カヲル「いいから」

正平「なにやらしてんだよ」

恭三「まさかお前らつるんで美保を殺したのか！？」

隼「違います！」

カヲル「このままじゃよくないよ！ 誰も前に進めないよ」

隼、スマホを取り出して操作する。

カヲル「事故にあった直後の美保さんの動画があります」

動画を再生する隼。

○動画

血まみれで道路に倒れている美保。

動画から隼の声だけが聞こえてくる。

隼「大丈夫ですか？ 今救急車呼びましたから」

小声で何かつぶやいている美保。

隼「なんですか？」

美保「ゴメンね……って」

隼「本当すみません。急に飛び出してきたか

らブレーキ間に合わなくて」

美保「正平に私が悪かったって……。ごめん
って……」

隼「もしもし？　もしもし？　気を確かに！
すぐ救急車くるから！」

○スナック

小さな画面を覗きこんでいる一同。

美千代は耐え切れず、離れていく。

恭三「これが美保の最後……」

美千代「狂人！　どうして人が死にそんな時
にこんな動画を撮影できるの？　どうい
う神経してるの？」

カヲル「分かりました？　死ぬ間際に彼女、
正平に謝ってたんですよ。それどういうこ
とか分かりますか？　いい子だから謝って
たんじゃないですよ！　謝ることがあった
から謝ってるだけですから」

恭三「何を言ってるんだよ」

正平「やめろよ」

カヲル「やめないよ！ 私、これからの人生、
負い目みたいなの感じながら生きたくない
もん」

恭三「謝ることって何だ？」

カヲル「先に浮気してたの娘さんの方です

よ！ 彼と結婚してた2年の間で何度も浮
気して、ずっと彼のお金使って、あげく彼
に暴力までふるってたんですよ！」

正平「……」

恭三「死人に口なしだからって、自分達を正
当化するために適当な作り話をするんじゃないよ！」

カヲル、鞆から取り出した数枚の紙を
机に放り投げる。

カヲル「疑うんなら自分で確かめてください。
そこに浮気した男たちの名前と住所と電話
番号がありますから」

美千代「こんなに沢山……」

カヲル「それでずっと苦しんでた彼を私、ほ
っとけなかったです」

正平「だからって俺が不倫してもいいってわけじゃないだろ」

カヲル「けど、死んだ人を悪く言っちゃいけないなんておかしいでしょ」

グラスを床に叩きつける美千代。

グラスが割れる音。静寂。

美千代「もういい……もうやめて……」

カヲル「けつきよく、真実がどうかどうでもいいんですよ。知ったところで幸せになるなんてこと稀ですから」

隼「そうそう、終わってしまったことは仕方ないですよ」

恭三「お前が言うな！」

隼「言いますよ！俺は、俺だって事故にあったせいで一生変わっちゃまったんすよ。だからってやってしまったことにずっと後悔して生きるよりは、これからどうやって生きていこうって、そうやった方がマシだっ
て思っちゃいけないんすか」

美千代「人の命を奪ったやつは一生後悔して

頭下げながら生きるのが当たり前でしょ！」

千鶴、隼の腕をタップする。

興奮している隼はそれを払いのける。

こんどは強く隼の腕を掴む千鶴。

隼「なんだよ」

千鶴「産まれそう」

隼「え？」

千鶴、よろよるとソファーに崩れる。

恭三「どうした？」

隼「産まれそうだった」

カヲル「このタイミングで？」

隼「どうしたらいい？ どうしたらいい？」

カヲル「救急車呼んで！」

正平「分かった」

美千代「待って」

千鶴に近づいていく美千代。

美千代「こいつらにも味あわせてやらなくち

ゃ。大事な子供を奪われる気持ちを」

美千代の手には灰皿。おもいきり振り上げる。

美千代を思いっきり突き飛ばす恭三。

恭三「こいつらと同じになるつもりか！」

美千代「なにが、なにがいけないの……」

急いで119に電話をする正平。

隼はずっと千鶴の手を握っている。

遠巻きに聞こえてくる救急車の音。

○正平のアパート・外観（日替わり）

引越し業者の軽トラが停まり、荷物を積み込んでいる。

○同・部屋

業者にサインをしている恭三。

恭三「じゃあよろしくお願いします」

脱帽して出ていく業者。

お湯を沸かそうとしている正平。

正平「お茶、飲んで行ってください」

恭三「いやいい。もう他人なんだから」

正平「そうですか」

恭三「強引な方法で申し訳なかったが、美保

の荷物をここに置いておくわけにもいかな
いからね」

正平「はい」

恭三「あの後、あの子がくれた紙に書いてあ
った連絡先に片っ端から電話したよ。今更
言う言葉でもないが、苦労かけたね」

正平「いえ」

恭三「だけど私は君には謝ることはできない」

正平「もちろんです」

恭三「娘のしたことはしたことで、それ
でもやっぱり私は君と、あの男を一生恨み
続けていくと思う。勝手な話に聞こえるか
もしれないが」

正平「そうしてください」

恭三「私はそういう生き方を選んだ」

正平「はい」

恭三「それじゃあ」

去っていく恭三にいつまでも頭を下げ
ている正平。

○隼のアパート

ベビーベッドで眠っている赤ん坊。

覗きこんでいる美千代。

お茶を持ってくる千鶴。

千鶴「お茶入りました」

美千代「はい」

美千代、視線は赤ん坊のままテーブルへ座る。

千鶴「色々買って頂いてすみません」

狭い室内いっぱいには遊具などベビー用品がある。

美千代「気にしないで。こんなことで私がしたことを許してもらえないと思わないけど」

千鶴「いえ、とんでもないです」

美千代「本当かわいいよね」

千鶴「はい」

泣きだす赤ん坊。

美千代「あー、どうしたの、泣かないで美保ちゃん」

美千代、赤ん坊を抱きかかえてあやす。

その光景を見て、涙が湧き出てくる千鶴。

○物流倉庫

必死に荷降ろしをしている隼。

○公園

小走りでやってくる隼。

ベンチにカヲルが座っている。

隼「すみません。ちょっとしか休憩とれないすけど」

カヲル「大丈夫、すぐにすむから」

隼「話って？」

カヲル「もうさ、正平に会わないでくれるかな」

隼「わかりました」

カヲル「やけに聞き分けいいんだ」

隼「あくまでも加害者と被害者遺族なわけだし。顔合わせれば二人ともどうしても考えちゃうし」

カヲル「あのさ、都合いいかもしれないけど、
全てなかったことにしたいんだよね。正平
が美保と結婚してたことも、あなたの事故
のことも」

隼「……はい」

カヲル「そりゃあんたはタテマエ上、事故の
事を忘れたいとか言っちゃまずいのかもし
らないけど、それもありなんじゃないかな
って思うの。そういう生き方であんたの周
りの人が救われるならさ」

隼「……」

カヲル「私たちもこれから普通の夫婦みたい
に子供産んで、育てて、普通に年とってい
きたいわけ。白状だとかひとでなしとか言
われてもそんなの関係なく、自分達の幸せ
をつかみたいの」

隼「いいと思います」

カヲル「だよねえ。うん、それだけだったか
ら。元気でね」

隼「はい」

カヲル「じゃあ」

隼「じゃあ」

ため息をつくカヲル。

隼「？」

カヲル「やっぱ無理だわ」

隼「え？」

手をあげたカヲルに反応して、軽く手をあげてしまう隼。

去っていくカヲルの後ろ姿を見つめている隼。

○道（夕）

歩いているカヲル。

目の前に正平が立っている。

正平「おかえり」

カヲル「うん」

正平「美保の荷物、全部引き取ってもらったよ」

カヲル「そう」

正平「やっと部屋が広くなった。あ、晩御飯

どうする？ どっか食べに行くか？」

カヲル「私と別れてください。お願いします」

正平「え？ 何言ってるの？」

カヲル「あなたとは結婚できません」

正平「え？ え？ 子供は？」

カヲル「一人で育てます」

正平「はあ？ 何言ってるんだよ。ようやく全

部片付いてこれからって時に」

カヲル「ようやく全部片付いたから今なの」

正平「何が不満？ バツイチだから？」

カヲル「キモチワルイの」

正平「キモキモ？」

カヲル「あなたキモチワルイの！ だって美

保が死んでから一度も泣いてないし、悲し

そうにもしてないじゃん！ どうして？

どうしてそんな感じでいられるわけ！」

正平「だって終わっちゃったもんはしょうが

ないじゃん！ 終わった命も。え？ じゃ

あなんなの？ 残された人はずっと死ん

じやった人のことを想って、後ろ向きなが

ら生きていかなきゃいけないの？ 前向いて生きて何が悪いの？」

カヲル「あなた前なんて見てない。何にも見てないよ。だから何にも感じてないの。人が：奥さんが死んで泣かない奴と結婚なんかして幸せになれるわけないでしょ！」

正平「俺が美保をひきずって毎日泣いてるなら結婚すんのかよ！」

カヲル「少なくともそっちの方がよっぽ人間ぽくてマシ！ 自分の都合の悪いこと見ないのは幸せってことじゃないでしょ」

正平「わかんないわ。全然わかんないわ」

カヲル「だから別れるの。あなたみたいになれば私もうまく幸せになれるかと思って頑張ってみたけど無理だったの。じゃあね」

歩き出すカヲル。

正平、しばらく立ちすくんだ後、追いかけてカヲルの腕を掴む。

正平「待てよ」

カヲル「もう遅いよ。追いかけるの、この夕

イミングじゃなかったでしょ」

カヲル、正平の手を振り払って歩いていく。

その姿を見送る、無表情の正平。

○道路（夕）

美保が亡くなった事故現場。

正平、花を手向けて手をあわせる。

通りかかった人々が口々に「可哀そうに」と言っている。

正平「涙なんか出てこない」

○正平のアパート（夕）

遺影の前で手をあわせている正平。

正平「俺は人間じゃない」

了